

『主イエスの呼びかけ』ヨハネ20:11-18

20:11 しかし、マリヤは墓の外に立って泣いていた。そして泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞくと、

20:12 白い衣を着たふたりの御使が、イエスの死体のおかれていた場所に、ひとり頭の方向に、ひとり足の方に、すわっているのを見た。

20:13 すると、彼らはマリヤに、「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。マリヤは彼らに言った、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どマリヤは振り返ってここに置いたのか、わからないのです」。

20:14 そう言って、うしろをふり向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気がつかなかった。

20:15 イエスは女に言われた、「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。

20:16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。

20:17 イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」。

20:18 マグダラのマリヤは弟子たちのところに行き、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した。

●序論

キリスト教での葬儀、納骨、記念会。そのすべては礼拝です。

亡くなられた方を想う悲しみを経験する家族・親族、そして友人たちの目を、その故人の魂を天に召された神さまからの約束の言葉を聞くのです。

1テサロニケ4:13 兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである。

そこに語られるのは、将来キリストの再臨によってもたらされるよみがえりと再会の希望です。そこでは、結びにこう語られています。

…こうしていつも主と共にいるであろう。だから、あなたがたはこれらの言葉をもって互いに慰め合いなさい。(同章:16-17)

そこでは、その目を、別離の悲しみから転じて主に向け、耳を傾けて希望の約束を聞くひと時をいただきます。「あなたがたが悲しむことがないため」と言われる。それが「礼拝」と言われるゆえんです。

今日、聖書には死という別離の悲しみにどん底まで打ちひしがれているマグダラのマリヤを見えています。

ペテロとヨハネが去ったと、取り残されたマリヤは、ただただ墓に向かい泣きつ続けていたのです。

涙にふさがれた目、悲しみに覆われていた彼女を、立ち上がらせた出来事。それが復活のイエスさまの呼びかけ「マリヤよ」…でした。

この出会いで彼女は変えられた。それが今日の結論です。

●本論

I. 悲しみの中にあるマリヤ

墓の前でマリヤが抱えていた悲しみの現実、彼女言葉で繰り返されています。

み使いたちはマリヤに…

「女よ、なぜ泣いているのか」と言った。マリヤは彼らに言った、「だれかが、わたしの主を取り去りました。そして、どこに置いたのか、わからないのです」。(:13)

復活のイエスさまもまた…

「女よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」。マリヤは、その人が園の番人だと思って言った、「もしあなたが、あのかたを移したのであれば、どこへ置いたのか、どうぞ、おっしゃって下さい。わたしがそのかたを引き取ります」。

御使いやイエスさまが問いかける「女よ、なぜ泣いているのか」との言葉には、「もう泣かなくていいんだよ。この空の墓は、そのことを証しているだよ」という風に促す言葉でもあります。

しかし、マリヤの心には届いていません。

さらには、園の番人と誤解した復活のイエスさまにさえ、「あなたが遺体をもっていったのなら、それをおっしゃってください。わたしがその方を引き取ります」。つまり、その遺体はわたしのものです…とまで訴えているのです。

イエスの遺体を求め、それを得られない悲しみを抱え込んだマリヤは、復活のイエスさまにさえ気づけず、そのイエスさまに、その遺体を渡せ、わたしが引き取る！とさえ主張するようになるという、倒錯ともいえる状況です。

そんな心をやわらげる、そういう呼びかけが、ここに必要なのです。

II. 名前を呼ばれたマリヤ

喪失感と悲しみに、ガチガチにこわばっていた心をふっと解きほぐす呼びかけが、ここにありました。

20:16 イエスは彼女に「マリヤよ」と言われた。マリヤはふり返って、イエ

スにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。

復活のイエスさまはすでにマリヤのそばに立っていました。マリヤも振り返って、このイエスさまを見ていたのに、それがわからなかったのです。

このところ20章のはじめからここに至るまで、何度も何度も「見た」という表現があります。

…後ろを振り向くと、そこにイエスが立っておられるのを見た。しかし、それがイエスであることに気づけなかった。(：14)

わたしたちの目は、” 見えているようで見えていない ” ということがある。わたしたちのそういう塞がれた目が、開かれる呼びかけをここでわたしたちは見ているのです。

それは、「マリヤよ」というごくありふれた呼びかけの言葉です。

でもそれは、マリヤのこわばった心の目を開く、まさにこれまで何度も耳にしてきたイエスさまの御声、呼びかけであったのです。

イエスさまが自分の名を呼んでくれる、その声がイエスさまの声だと気づく。それはとても大切に、霊的な、祝福の経験であると思います。

そうして聞いたなら、わたしたちはこの方に向き直ることができる、そんな信仰の経験をいただくことができるのです。

だから、祈りの生活は大切です。

それはただ自分の願いごとや訴えを主張するだけではなく、聖書を通して御言葉を、御声を聞くことで、イエスさまとの対話を重ねる。それが祈りの世界です。

そこで、呼びかけてくださるイエスさまの御声を重ねて経験できるのです。

Ⅲ. イエスさまに向き直るマリヤ

20:16 …マリヤは振り返って、イエスにむかってヘブル語で「ラボニ」と言った。それは、先生という意味である。

ついに、墓にイエスさまの遺体を、死んだイエスさまを探していたマリヤは、その反対側、自分の後ろに立つ、よみがえられたイエスさまに目を向けることができました。

そして遺体に向かってではなく、生きておられるイエスさまに向かって「ラボニ（先生）」と呼びかけることができたのです。

葬儀でも、また墓前での記念会でも、それをわたしたちは礼拝としてささげます。

わたしは皆さんに御言葉を通して、天に目を向けてほしいと願って賛美を導き、また御言葉をとりつぐようにしています。

それは、墓から天に目を向ける、墓から復活の希望に心に向ける、そういう祝福の

時としてとらえているからです。

使徒信条最後には、こうあります。

我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。 アーメン

弟子たちも、またマグダラのマリヤも、よみがえりについて、イエスさまの口から聞いていました。けれども、それが本当にわかったのは、この復活のイエスさまとの出会いによってでした。

いや、それがイエスさまだけの物語ではない。自分たちの永遠の命、自分たちの体のよみがえりと結ばれるという希望に結ばれるのは、あのペンテコステの日、聖霊に体験によってであったと言えます。

そういう意味で、わたしたちは、イエスさまの証のもとに、聖霊によって復活信仰に生きるクリスチャンとして生かされているのです。

●さいごに

マリヤは、「わたしの主を誰かが取り去った。わたしの主を返せ！」と嘆き訴える人でした。

でも、このイエスさまは、彼女が自分のものとするところのことができるようなお方ではないことが明らかになりました。それは復活の事実によってあきらかになったのです。

20:17 イエスは彼女に言われた、「わたしにさわってはいけない。わたしは、まだ父のみもとに上っていないのだから。ただ、わたしの兄弟たちの所に行って、『わたしは、わたしの父またあなたがたの父であって、わたしの神またあなたがたの神であられるかたのみもとへ上って行く』と、彼らに伝えなさい」。

そして、彼女は、世界で最初の復活のイエスさまの証人とされ、弟子たちのもとに遣わされる人とされていったのです。

20:18 マグダラのマリヤは弟子たちのところに行き、自分が主に会ったこと、またイエスがこれこれのことを自分に仰せになったことを、報告した。

ヨハネは、この日のマリヤの早朝から、おそらく半日以上をかけての個人的な体験談を取り上げています。墓の前で泣いていたマリヤを、ヨハネはよく知っていたからです。

そんな彼女が、いやされ、慰めを受け、いやそればかりか、喜びに変えられ、先には悲しみを訴えに弟子たちのもとに行った人が、今度は、イエスさまの最初の復活の証人として遣わされきたことが、ヨハネの目に驚きに映っていたからです。

復活のイエスさまとの出会いの経験が、彼女を全く変えた。そしてわたしたちもつくり変えてくださることをわたしたちは知ることができるのです。